
魔法少女リリカルなのはstrikers ～ 黒き風を纏いし者～

十字架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはstriker`s 黒き風を纏いし者

【Nコード】

N0929J

【作者名】

十字架

【あらすじ】

J・S事件が終わり3月となり機動六課の試験運用期間が終わろうとしていた。

そんな中、新たに起きた一つのロストログア事件。

事件の担当となる機動六課メンバー。

新しく六課に出向して来た懐かしき友人。

それは新たな悲劇の始まりとなるのか。

魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s 黒き風を纏いし者

．．．．始まります．．．

誠に勝手ながら、忙しくなり小説を書く時間が無くなってしまい、更新を停止する事になりました、深くお詫びいたします。これまで読んでいただいた方々ありがとうございました。

一話（前書き）

魔法少女リリカルなのはのファンフィクション（二次創作作品）です。原作キャラの口調や性格が少し変になるかもしれないので原作キャラに思い入れが強い方は気を付けてください。

一話

新暦76年、3月15日

AM10:36

機動六課隊舎・部隊長室に茶色のショートカットの女性と30cm位の銀色のロングヘアーの少女が仕事をしていた

???「今日も平和だといいですねはやてちゃん」

はやて「そっやなあリン」

茶色のショートカットの女性……………八神はやて、機動六課の部隊長。夜天の主。

30cm位の銀色のロングヘアーの少女……………リンフォース?（ツヴァイ）、はやてのユニゾンデバイス

ビー……………ビー……………

緊急警報が鳴り響き辺りにアラートの文字が現れる

はやて「シャーリーどないしたんや?」

画面が現れ

シャーリー「八神部隊長、レリックの反応が出ました。それと同じ場所にもうひとつ別のロストログリア反応もあります。」

はやて「なんやて！場所は！？」

シャーリー「場所は管理外世界「レセプティー」です」

私は画面を開き親友であり頼れる隊長である二人を呼ぶ

はやて「なのはちゃん、現場ヘスターズのみんなと行ってくれるか？
フェイトちゃんとライトニングのみんなは隊舎で出動待機し
てや」

画面に現れたのは栗毛色の髪をサイドポニーテールにした女性と
金色のロングヘアの女性が現れた。

なのは「了解！はやてちゃん」

栗毛色の髪をサイドポニーテールにした女性……………高町な
のは、時空管理局のエースオブエー、機動六課スターズ分隊長。

フェイト「こつちも了解。はやて」

金色のロングヘアの女性……………フェイト・テストロッサ・
ハラオウン、心優しき金の閃光、機動六課ライトニング分隊長。

……………
……………
……………
……………

管理外世界「レセプティー」

「ここに我々が求める物があるか？」

「そうだ。」

白いローブの男がそう言うと二人は消えるようにその場を後にした。

・
・
・

「管理外世界」「レセプティ―」砂漠地帯上空

スターズ分隊のみんなとレリックと謎のロストログアの搜索の為、
レセプティ―に来ていた。

なのは「この辺にあると思うけど」

探しながら呟くと

スバル「こちらスターズ03、なのはさんレリックとロストログア
を発見しました。」

なのは「わかった。こちらスターズ01。ロングアーチへ、レリッ
クとロストログアを発見封印の後回収します。ヴィータちゃんにも
連絡をお願い。」

シャーリー「こちらロングアーチ。了解」

ロングアーチに連絡して発見現場へ急ぐ

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

管理外世界「レセプティ―」砂漠地帯オアシス

私が現場に来たときにはスバルとティアナがレリックとロストロギアを封印作業をしていた。

ティアナ「なのはさん、レリックの封印は出来ましたがこっちのロストロギアは封印が出来ないんです。」

なのは「えっ！？なんで」

ティアナ「封印しようとするとも魔力が吸い取られるんです。」

私は少し考え

なのは「わかった。そっちは私がやるから二人は先にレリックを運んで」

スバル「わかりました。」

二人に指示した後ロングアーチとの通信を開き

なのは「こちらスターズ01、ロングアーチへレリックは封印してスバルとティアナが運んでいます。ロストロギアの方は封印処理が出来ないので私が直接運びます」

煌！

私のいる場所を中心に蒼い閃光が降り注いだ

レイジングハート「プロテクション」

レイジングハートが自動防御をしてくれたが爆風に吹き飛ばされる

なのは「何！？」

ロストロギアがあつた所には白いローブを身に纏つた男がいて剣型のロストロギアを引き抜こうとしていた

なのは「待つてそれに触らないで！！」

????1「貴様には関係無い」

そう言つとこつちに手のひらを向け蒼い閃光を放つため光をためていく

????1「死ぬ」

殺意を秘めた蒼き閃光を放とうとする。

????「シュワルベフリーゲン！」

弾！弾！弾！弾！

4発の赤き光を纏つた鉄球が男を襲う

斬！斬！斬！斬！

男は剣型のロストロギアを引き抜き全ての鉄球を真っ二つにしていく

なのは「ありがとう！ヴィータちゃん」

ヴィータ「なのはこいつは何なんだ？」

なのは「分からないけどあれを取り返さなきゃ」

ヴィータ「ああ」

私とヴィータちゃんがそれぞれのデバイスを構えるが

?????「目的は果たした長居は無用だな」

男はそう呟くと足元に魔法陣が現れる

ヴィータ「逃がすか！」

ヴィータは自身のデバイス……グラーフアイゼンを振り上げ男へ突っ込む

?????「転移」

そう言つと男は魔法陣の中へ消えていった

ヴィータ「ちくしょう！逃げやがった」

なのは「仕方ないよヴィータちゃん一旦スバル達と合流して六課に
帰ろう」

私達は六課へと帰還した

一話（後書き）

読んでいただいております。少しでも早く更新が出来るように頑張ります。

二話

3月17日

時空管理局戦艦「クラウドディア」艦長室

俺は一昨日発生して六課が担当する事になったロストロギア事件の話をするためクラウドディアの艦長で友人でもあるクロノの所に来ていた

悠騎「クロノ、このロストロギアと男達の推定魔導士ランクは本当なのか？」

クロノ「ああ間違い無い」

悠騎「二人ともオーバーSランク」

悠騎「なのは達の傷は確か完治してなかったよな」

クロノ「まだ全力での戦闘は無理だろう」

悠騎「それなら俺もなのは達と一緒に捜査したいんだが何とかしてくれないか？」

クロノ「六課はこの事件が終結するまで解散が延期になったから入れることは出来るが」

悠騎「何か問題でもあるのか？」

クロノ「あそこは高位の魔導士ランク持ちが多いから3ランクダウンでも上が納得するかが問題なんだ」

悠騎「それなら5ランクダウンでもいいC+になっても問題ない」

クロノ「そんなにランクを下げてても大丈夫なのか？」

悠騎「大丈夫だカートリッジの使用量を少し増やせば何とかなる。」

クロノ「それなら僕も上を何とかしよう。ただしリミッター解除は僕とカリムの二回になると思う気をつけるよ」

悠騎「ありがとう世話をかけるな」

クロノ「いいよ僕もなのは達が心配だったから」

悠騎「じゃあ明後日から六課に行くよ」

クロノ「わかったはやてには連絡しておくよ」

クロノと握手して艦長室から出た。

3月21日

六課隊舎部隊室

俺は六課の部隊室にいた

悠騎「本日より機動六課に出向してきました水無森悠騎執務官です
よろしく願います」

はやて「久しぶりやな悠騎君こちらこそよろしゅう願います」

悠騎「本当久しぶりだなところではやフェイトは？」

はやて「二人はフォワード陣と休憩中や」

悠騎「それなら少し訓練場借りていいか？」

はやて「いいよ」

悠騎「ありがとう」

はやて「その前にコールサインを決めとこか？」

悠騎「それじゃあ俺のコールサインはスカイ01で頼むよ」

はやて「決まりや」

悠騎「じゃ訓練場に行ってくるよ」

はやて「じゃまた後でな」

俺は部隊長室から出て訓練場に向かった

機動六課訓練場

俺は訓練場で空間シュミレータを市街地にセットしてガジェット型を10体ガジェット型を5体出す。そして手首につけている
プレスレットに呼び掛ける

悠騎「クルス、バリアジャケットを頼む」

クルス「OKマイロード、バリアジャケットセットアップ」

黒地のロングパンツと紺のインナーに黒のロングコートを纏う

悠騎「さてとやるか」

右手の中指につけている指輪を前に出し

悠騎「ファントム、ガンフォーム」

指輪は拳銃（ワ サイP99）へと姿を変えた

悠騎「よし」

デバイスを片手にガジェットに向かって走る

悠騎「ファントム、バレットノーマル」

ファントム「Yes」

弾丸を選んでカートリッジを1発ロードする

ガジェット？型に向かって3発の魔力で作った弾丸を撃つ。

魔力の弾丸はガジェット？型に命中し三体をスクラップにする。

ガジェットは俺に向けてビームを連射してくる。

悠騎「遅いな」

放たれたビームを最小限の動きで回避しながら間合いを詰める。

悠騎「ファントム、ブレイドフォーム」

ファントム「Yes」

ファントムの銃口から魔力の刃を出しガジェット？型に突き刺す。

悠騎「ブレイドブラスト」

魔力の刃をガジェットの中で爆発させる

悠騎「ファントム、バレットマグナム」

ファントム「Yes」

再び弾丸を選んでカートリッジを1発ロードする

振り向きざまに1発の弾丸を撃ちガジェット？型を破壊する

悠騎「ファントム、バレットバースト」

ファントム「Yes」

カートリッジを3発ロードしてガジェット？型2体と？型6体が
密集している所へ撃ち込む

爆！轟！

バーストバレットは？型へと命中し？型を爆発させる。

その破片によって周りにいた？型6体と？型1体をも爆発する。

悠騎「あと2体か」

カートリッジを1発ロードし銃口から魔力の刃を出し？型の懐へ

入り

悠騎「ファントム、ブレイドバースト」

ファントム「Yes」

更にカートリッジを2発ロードし魔力の刃を？型に突き刺し引き金を引く

暴！

魔力の刃をファントムから切り離しガジェットの中で爆発させる

悠騎「ラスト！」

左手に魔力を集め魔力変換資質で魔力を暴風へと変える。

その風を魔力によって圧縮し膜状バリアでくるむ。

悠騎「サイクロンシューター……ファイア！！」

荒々しき風をその中に秘めたスフィアは？型の内部へと入りその風を解放しガジェットを中から切り刻む

悠騎「よし終了。ファントムお疲れ様、クルスバリアジャケットを解除してくれ」

ファントムを指輪へと戻し服装を制服へと戻す

悠騎「戻るか」

空間シュミレーターから出口へ向かった。

出口へ着くと隊舎の方から歩いてくる集団がいた。

悠騎「おゝいなのは」

歩いてくる集団に向かって手を振る

なのは「えっ！？悠騎君久しぶり！！」

なのはも手を振りながら近寄ってくる。

悠騎「なのは元気にしてたか？」

なのは「うん！元氣だよ」

悠騎「そうか良かった」

なのは「はやてちゃんが言った新しく来る人って悠騎君だったんだ」

悠騎「ああこれからよろしく」

なのは「うん頑張ろうね!」

なのはと話しているとオレンジ色の髪をツインテールにした少女が話し掛けて来た

ティアナ「あの～なのはさんこちらのかたは?」

なのは「ああそうだねそれじゃあ悠騎君自己紹介して」

敬礼をして

悠騎「初めまして水無森悠騎執務官です」

フォワード陣もそれぞれ敬礼をして

スバル「スターズ分隊スバル・ナカジマ二等陸士です」

ティアナ「スターズ分隊ティアナ・ランスター二等陸士です」

エリオ「ライティング分隊エリオ・モンティエル二等陸士です」

キャロ「ライティング分隊キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

悠騎「今日から事件が解決するまで六課に配属する事になったからよろしく」

フワード陣「よろしく願います。」

なのは「それじゃあ午後の訓練は悠騎君との親睦をかねて模擬戦にしよう」

悠騎「面白そうだな」

なのは「それじゃあみんな準備してね」

二話（後書き）

1000以上のアクセスありがとうございます。作者の文才が余りないので面白く無いかもしれませんが早く更新が出来るように頑張ります。

三話

「六課訓練場・空間シミュレーター」

お互いに300m位離れたところでバリアジャケットを着る。

なのは「悠騎君準備はいい？」

悠騎「俺は何時でもいいぜ」

なのは「それじゃあレディ……………ゴォー!!」

悠騎「まずは様子を見るかファントム、バレットノーマル」

ファントム「Yes」

弾丸を選択しカートリッジを1発ロードする

最初に来たのは青い帯状の魔法陣の上を駆けてくる青い髪の少女・
……………スバルだ。

弾！弾！弾！弾！

ノーマルバレットを4発撃ち出す

スバルはプロテクションを張り防ぐ

悠騎「なかなか硬いな」

スバル「はあああああ」

気合いの言葉と共に右ストレートを放つ

しゃがみながら突き出された右手を持ち一本背負いの様に投げ飛ばす

更に追撃とばかりにファントムから魔力弾を放つ。

弾！

スバルに向かっていく魔力弾はスバルの後ろからきたオレンジの魔力弾が迎撃する。

スバルの後ろには銃型のデバイスを両手に持ったオレンジ色の髪をツインテールにした少女……。ティアナがいた。

ティアナ「クロスファイア……。シュート！！」

オレンジ色の魔力弾を8発撃ってくる。

悠騎「サイクロンシューター……。ファイア！！」

風を秘めし魔力弾を8発撃ち出しティアナの魔力弾を撃ち落とす。

今度は後ろから槍を持った赤髪の少年……。エリオが突っ込んできた。

エリオ「はああああ」

振り向きながらエリオの槍を蹴り穂先をずらし避ける。

再びスバルが間合いを詰めてくる

悠騎「ファントム、バレットマグナム」

ファントム「Yes」

カートリッジが2発排出され強力な弾丸がスバル目掛けで向かっていく

瞬！

弾丸はすり抜け、スバルは幻のように消える

悠騎（高速移動？・・・・・・いや幻術か）

スバル「はあああああ」

真上から帯状の魔法陣の上を駆け、右手のデバイスの歯車状のパーツを唸らせる

スバル「リボルバーキャノン！！！！」

悠騎「プロテクション」

上に防御魔法を張りスバルの攻撃に備える

鈍！

鈍い音と共に俺のプロテクションにひびが入る

悠騎「バリアバースト!!」

プロテクションの表面で爆発を起こしスバルを吹き飛ばす

キャラ「アルケミック」

エリオ「サンダー」

キャラ・エリオ「チェーン!!!!!!」

俺の後方の離れた所にエリオと桃色の髪をしたエリオと同年位の少女…………キャラがいた

エリオとキャラが協力して行う魔法によって四肢を電気を纏った鎖によって拘束される

ちよつとやべえな
悠騎

スバル「うおおおおお!!!!!!」

スバルはファントムを蹴り飛ばす

悠騎「サイクロンシューター…………ファイア!!」

追撃される前に数発の魔力弾で距離をとらせる

鎖によって拘束され俺の前5m程の所にスバル、後ろ5m程の所

にティアナ、その後ろにエリオとキヤロがいる

スバルはカートリッジをロードし左手の前に魔力スフィアを作り
魔力を込めていく

スバル「デイバインー！」

ティアナもカートリッジをロードし魔力を込めていく

ティアナ「ファントムー！」

スバル「バスタアアアー！！！！！」

轟！

ティアナ「ブレイザアアアー！！！！！」

轟！

前から青い光の奔流が、後ろからはオレンジの光奔流が迫り

暴！

二つの光の奔流がぶつかり辺りに白煙がたちこめる

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

スバル『やったね！ティア』

ティアナ『ちびっ子達のおかげありがとう』

私達は勝ったと確信した。………煙が晴れるまでは

悠騎「はい俺の勝ち」

ティアナ「えっ!？」

私の後ろには黒い長剣を持った悠騎さんがいた

スバルやエリオやキャロの周りには大量の剣の形をした黒い魔力弾が取り囲んでいた

なのは「はいみんなそこまで」

なのはの号令と共に今回の模擬戦は終了した

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

〈空間シュミレーター前〉

なのは「悠騎君どうだったうちのフォワード達は？」

悠騎「個人個人の能力も凄いけど連携がスムーズでよかったと思うよ。正直最後の砲撃の時は焦ったよ」

なのは「最後のはどうやったの？」

悠騎「それはこいつのおかげさ」

腕につけている腕輪を見せる

悠騎「こいつはクルス、俺のもう一つのデバイスだ」

クルス「よろしく御願います。」

なのは「よろしく」

なのは「悠騎君もう一つデバイス持ってたんだ」

悠騎「ああ………あの時は………」

スバル「デイバイン！」

ティアナ「ファントム！！」

スバル「バスタアアア！！！！！」

車轉！

ティアナ「ブレイザアアア！！！！！」

轟！

前から青い光の奔流が、後ろからはオレンジの光奔流が迫ってきた

悠騎「クルス！ノーマルジャケットパージ」

ジャケット表面の魔力が爆発し鎖が弾け飛ぶ

悠騎「アサルトジャケットセツト、チェンジストレージ」

クルス「OKマイロードアサルトジャケットセットアップ、モードストレージ」

黒いロングコートと紺のインナーが消え、
 赤いインナーと黒いベストへと変わる

悠騎「クロイツバスターソード」

魔力によって自分自身が隠れる程の刀身を持った黒い大剣を二振り作り出す

二振りの大剣を盾に前後からの光の奔流を受け止める

悠騎「クロイツブレード」

魔力で漆黒の長剣を作る

瞬！

高速移動魔法でティアナの背後へ移動し他の三人の周りに短剣型の黒い魔力弾をセツトする

悠騎「はい俺の勝ち」

・
・
・

悠騎「ってな感じ」

なのは「って事は悠騎君最初から真面目にやって無いってこと!？」

なのはは睨みながら言い寄ってくる

悠騎「ちよつと待てよ俺は真面目にやってたよ……ただクルスを使うのはやばい時だけって決めてるんだ」

スバル「どうしてですか？」

悠騎「こいつは魔力消費が多すぎてリミッターがあると長くは使えないんだ」

スバル「そうなんだか」

悠騎「しかもこいつにはカートリッジシステムは無いからな」

なのは「悠騎君、今度は隊長達と模擬戦やらない？」

悠騎「いきなりだな」

なのは「いいの!今度は最初からクルスも一緒にね」

なのはは満面の笑みで言う

悠騎「けど隊長って言ってもお前しか居ないぞ」

フェイト「悠騎私達なら居るよ」

悠騎「えっ!？」

俺が振り返るとフェイト、シグナム、ヴィータの三人がいた

悠騎「何で居るんだよ」

フェイト「なのはが来てって」

シグナム「高町に呼ばれて」

ヴィータ「なのはに言われて」

三人は言葉は違うが同じことを言っている

なのは「悠騎君と私達で模擬戦する事になったよ」

悠騎「なつたじゃねえだろ」

俺はなのはを半眼で睨む

ヴィータ「いいじゃないか」

フェイト「そうだよやろうよ」

シグナム「早く用意しろ」

三人とも賛成する・・・若干一名いきいきとした声で
悠騎「はぁ・・・分かったやるよ」

こうして本日二度目模擬戦が決定した

三話（後書き）

こんな駄文に3500以上のアクセスありがとうございます。

これからも面白くできるよう、早く更新できるよう頑張っていきます。

四話（前書き）

すみません本業（大学）が忙しかったので遅れました。

本業（大学）が忙しくいので更新まで時間がかかると思います。

後書きにオリキャラのプロフィールを載せておきます。

四話

悠騎「はあゝ何でこんな事になったかなあ」

俺はなのは達隊長陣と模擬戦をする事になり空間シュミレーターの中でノーマルジャケットを着ていた

クルス「まあ諦めるしか無いですよ。それに私を使うのも久し振りのですから感覚を思い出すのにちょうどいいと思いますよ」

ブレスレット・・・・・・・・クルスは光りながらそう言う

悠騎「まっいいか。クルスやるからには手加減なしで行くぞ」

クルス「イエス、マイロード」

なのは「悠騎君準備はいい？」

悠騎「いいぜ」

なのは達と俺との距離は約100mはつきり言ってもやりにくい距離だ

なのは「それじゃあティアナ合図よろしく」

ティアナ「はいレディ・・・・・・・・ゴォー!!」

ティアナの合図と共にシグナム、ヴィータが接近してくる

悠騎「クルス！サイクロンシューター」

クルス「サイクロンシューターセット」

悠騎「ファイア！！」

風を閉じ込めた魔力弾を10個ほど作り二人に向け撃ち放つ

二人が避けている間に後ろに下がり距離を取る

悠騎「さっそくで悪いがいくぜクルス！ノーマルジャケットリリースアサルトセットチェンジストレージ」

クルス「OKマイロード。ノーマルリリースアサルトセットアップモードストレージ」

ロングコートが消え紅いインナーと黒いベストになりプレスレットがフィンガーレスグローブと小さなガントレットに変わる

悠騎「顕れ舞え無限の剣達よ。ソードワールド」

クルス「Yes mylord」

辺りに大剣、長剣、短剣等様々な形の黒い魔力剣が数百本と出現する

悠騎「いくぜ！」

長剣を掴みシグナムとの距離を詰めていく

悠騎「はあああああ」

シグナム「はあああああ」

閃！

閃！閃！

閃！閃！閃！

閃！閃！閃！閃！

悠騎とシグナムの剣技がぶつかり合っていく

・
・
・
・
・
・

なのは「すっかり蚊帳の外だね」

フェイト「うん」

ヴィータ「しゃあねえ奴らだな」

三人が呆れながら話していると二人の距離があく

・
・
・
・
・
・

悠騎「いい加減終わらせようぜ」

はあ・はあ・と荒くなった息を整えながら言う

シグナム「ああ・・・あっちの三人も暇そうだな」

シグナムは少し余裕があるようだ

ああクルスにもカートリッジシステム付けときゃよかった

今更ながら後悔する

システム「いくぞ」

シグナムはカートリッジをロードしその愛剣に炎を纏わせる

悠騎「まだ使いたくなかったけど・・・集え我が剣達よ」

ソードワールドで出した剣の10本程の形がぶれ黒い光となって
集まってくる

シグナム「紫電」

シグナムはレヴァンティンを正眼に構えタイミングをはかる

悠騎「閃風」

黒き剣に烈風を纏わせ顔の横、剣先をシグナムへ向け腰をかるく落とし構える

シグナム「一つ閃!!!!!!」

烈火を纏った剣が脳天めがけて振り下ろされる

悠騎「一つ天!!!!!!」

烈風を纏いし神速の突きをシグナムの腹めがけ放つ

瞬！

凄まじい風を受けシグナムは後ろのビルへと飛ばされる

悠騎とシグナムの勝敗を分けたのは……速度に特化した烈風を纏った一点への突きと威力に特化した烈火を纏った縦の斬撃の速さの差だった

悠騎「あと三人かぁ」

悠騎はかなり疲れている

悠騎「面倒だから一人づつ一発勝負にしようぜ」

俺の魔力が残り少ないので一発勝負を持ちかける

なのは「いいよねフェイトちゃん、ヴィータちゃん」

フェイト「私はいいよ」

ヴィータ「私から行くよ」

ヴィータが前に出る

ヴィータ「いくぞアイゼン」

ヴィータは自身のデバイスを巨大なハンマー……ギガントフォルムにし振りあげる

悠騎「パワー勝負か」

シグナムの時に使った剣を捨て近くに作っておいた刃渡り2m程の大剣は手に取る

悠騎「集え我が剣たちよ」

今度は辺り約五百本の剣の形がぶれ黒い光となって集まってくる

荒々しき風を大剣に纏わせ構える

ヴィータ「轟天っ爆碎!!」

悠騎「暴風」

ヴィータによって巨大なハンマーが振り下ろされる

ヴィータ「ギガントシュラアアク!!」

俺は振り下ろされるハンマーを迎え撃つ形で大剣を振るう

悠騎「剛閃つ！！！！」

轟！

二つの力が一瞬拮抗する

ヴィータ「はあああああ」

悠騎「烈破つ！！！！」

暴！

悠騎の大剣は形を失い暴風となってヴィータは吹き飛ばす

ヴィータとの勝負を終え残りの二人の方を向く

悠騎「魔力が保たないから最後は二人同時でいいか？」

なのは「いいよ」

フェイト「私も」

二人は俺の提案を了承する

悠騎「それじゃあいくぜ！」

俺は魔力で長剣を作り左の腰へ構え精神を集中する

なのは「レイジングハート、エクシードドライブ」

フェイト「バルディシュ、サードフォーム」

なのはのデバイス・・・・・・・・・レイジングハートは槍の様な形へ変わる

フェイトのデバイス・・・・・・・・・バルディシュは大剣へと形を変える

悠騎「集え我が剣達よ」

辺りに残っていた全ての剣が黒き光となって集まってくる

なのは「全力全開スターライト」

辺りから桃色の光がレイジングハートの先に集まる

フェイト「雷光一閃プラズマザンバー」

上空からバルディシュへ雷が落ち刀身を電雷が覆う

悠騎「貫け風神ゲイルセイバー」

集まってきた黒き光が黒き風となり剣を包む

なのは「ブレイカアアア！！」

フェイト「ブレイカアアア！！」

悠騎「スラッシャアア！」

轟！

暴！

膨大な量の魔力と魔力のぶつかり合い

お互いが相手を喰らい尽くそうとせめぎ合う

煌！

眩い光と共に魔力の余波が辺りを覆う

ああ・・・模擬戦しなきゃ良かった

後悔の念と共に俺の意識は暗闇に沈んでいく

四話（後書き）

ミナモリユウキ
水無森悠騎

性別・男

年齢・19

利き手・両利き（元は左利き）

役職・執務官

階級・一等空佐

魔力光・黒

魔力値・SS+

魔力変換資質・疾風

魔導士ランク・空戦S+

使用魔法・特殊ミッド式（ミッド式を主体にベルカ式を混ぜた魔法）

使用デバイス・クルス、ファントム

容姿・身長175cm細めだが見た目以上に筋肉がある。髪は黒の短髪、瞳も黒

性格・普段は冷静だけど友達や大切な人の事になると熱くなる

なのは達とは小中学校の同級生

文才の無い作者ですが温かい目で見守ってください。感想やアドバ
イスも受け付けているので良かったらどうぞ

五話

目が覚めると見知らぬ天井。

あれ……ここどこだ？

独特な薬の匂いに薬や包帯が入っているだろう棚、今俺が寝ているベッド……医務室か？

シャル「大丈夫？」

金髪のショートボフで制服の上に白衣を着た女性が話しかけてきた。

悠騎「大丈夫、ありがとう。……ところで誰が運んでくれたんだ？」

シャル「フォワードのみんなよ」

……あいつらにもお礼言つとかないとな。と思いながら、時計を見ると五時を回っていた。

悠騎「シャル、今からオフィスに行くが大丈夫だろ？」

シャル「ええ、問題ないわよ」

シャルの了承を得て医務室を出て行く。

……

・
・
・
・
・

「オフィス」

たくさんのデスクが整然と並び多くの局員が忙しなく働いている。

そのデスクの中に青い髪の少女とオレンジ色の髪の少女……スバルとティアナがいる。

悠騎「スバル、ティアナ」

俺は二人に近づき声をかける。

スバル「あつ悠騎さん大丈夫でした？」

悠騎「ありがとう大丈夫だ。……迷惑かけてすまなかった」

ティアナ「いえ。迷惑だなんて」

ティアナは両手を小さく振りながら言う。

悠騎「そうだライトニングの二人にもお礼を言いたいんだけど」

俺は辺りを見渡しながら言う。

ティアナ「エリオとキャロならフェイト隊長と一緒に外回りに行っていますよ」

ティアナが教えてくれる。

悠騎「じゃあ後にするか」

俺は「じゃあな」とスバルとティアナに声をかけなのはが座っているデスクへ向かう。

悠騎「なのは」

近づき声をかけるが反応がない。

悠騎「なのは……なのは」

先ほどよりも大きな声で呼びかける。

なのは「あっと……ごめん。どうしたの悠騎君？」

悠騎「いや……さっきはすまなかった。訓練途中で気絶しちゃって」

なのは「いいの……フォワードのみんなにもいい経験になったし」

悠騎「ありがとう。なのは」

なのは「うん！」

なのはは笑顔になってくれる。

悠騎「……ところで、さっきはどうしたんだ？ぼーっとしてたみた

いけど」

なのは「あっ……あのねこの間のロストロギアの事を考えてたの」

なのはは笑顔から仕事をする真剣な顔へと変わった。

悠騎「ああそのロストロギアの事か。形状が剣って事位しかまだわかって無いからな」

……そうまだロストロギアの事は殆どわかって無い状況だ。

なのは「うん……今回の件にもレリックが関わってるから私……心配で」

なのはは悲しそうな顔になる。

今回の事件にも……そう約半年前にあった事件……ジエイル・スカリエッティ一味によるミッド地上本部襲撃その後にあった大規模テロにもレリックと言う名のロストロギアが関わっていた。

悠騎「大丈夫だよなのは。何のために俺がいると思ってるんだ？」

俺は笑顔を見せる。

なのは「ありがとう。悠騎君」

なのはも笑顔になってくれた。

それじゃ俺も仕事に戻るよ。と言って新たに増設された俺のデスクへ向かう。

……さて今日の仕事はつと前の事件の報告書を完成させて、今回の事件の報告書に目を通す位かな。

悠騎「クルス、報告書を仕上げてくれ」

クルス「イエス、マイロード」

クルスに前の報告書の方を任せ、今回の報告書を見る。

……管理外世界「レセプティ」にてレリックと正体不明のロストロギアを発見し回収にスターズ分隊が向かいレリックを封印、ロストロギアは封印出来ずレリックだけ先にスターズ03、04に回収させようとしたが謎の人物によって奪取された。ロストロギアの方もスターズ01が回収作業中に襲撃され奪取された。……って所か、それなら今は襲撃者の正体とロストロギアの正体を調べてみるしかないか。

後でユーノに頼んでみるか。

クルス「マイロード報告書の仕上げ終了しました」

悠騎「ありがとう。じゃあそれ送つといってくれ」

クルス「イエスマイロード」

クルスに報告書を送ってもらい仕事は一段落した

休憩とユーノへ調査依頼を兼ねて屋上に行くでしょう。

屋上

海沿いの六課隊舎の屋上から観る景色はとても綺麗だ。

クルス「イエスマイロード」

悠騎「久し振りだなユーノ」

悠騎「早速ですまないが調べてもらいたい物があるんだ」

悠騎「今から送るロストロギアについて調べてくれ」

56

ユーノ「わかった。調べてみるね」

悠騎「忙しいだろうが頼むよ」

ユーノ「任せて。解ったら連絡するよ」

悠騎「ありがとう。ユーノ」

それから少しの間雑談をしてオフィスへ戻った。

それから帰っていたエリオとキヤロ、フェイトにお礼を言って書類をまとめて六課の隊員寮へと向かう。

〈隊員寮〉

はやてに聞いていた部屋へとはいる。

やっぱり殺風景だな。……そこにはベッドやテーブル等生活に必要なものと宅配便で送った俺の荷物しかなかった。

まあ仕方ないか。そう思いながらまず荷物をばらす。

二十分程で荷物の整理を終えた。

悠騎「今日さっさと寝るか」

そう思うと風呂へは入りこの日は就寝した。

五話（後書き）

遅くなって申し訳ありません。これから更新が遅くなるかもしれませんが頑張って書くので温かい目で見守ってください。

六話

俺が六課へ出向して一週間がたった。ユーノからの連絡まだこず新たな事件が起きる気配もなく、フォアード陣の模擬戦の相手をしている。

　　食堂　　

今は午後の訓練が終わり俺となのは、ヴィータ、フォアードの四人と一匹で夕食を食べている。

悠騎「本当にスバルとエリオはよく食べるなあ」

エリオ「そうですか？」

スバル「これ位普通ですよ」

二人はそう言うが普通の男性が食べる量の数倍は食べている。

ティアナ「二人は何時ものことですよ」

キヤロ「悠騎さんはそんなに食べないんですね」

悠騎「そうかあ？」

人間って慣れると恐ろしいなあ。っと思いつながら普通なら多いと思われる量が入った皿から料理を口へと運ぶ。

（ 9 : 0 0 ）

その後、談笑を交えながらの夕食は終わり。オフシフトのフォアード陣は隊員寮へ帰り、なのはとヴィータの二人は残った仕事をするためオフィスへ行った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

俺は今一人で空間シュミレーターの中にいる。

周りは何もない荒野にしてある。

その中でいつもの様に魔力を圧縮し剣を造り出す。

それは悠騎自身の身体さえ隠してしまう位の大きな刃を持つ大剣。

手にずっしりとした重さを感じながら正眼に構える。

袈裟斬り。

踏み込んで横の一閃。

重い大剣に重心を狂わされるのを修正しながら縦の一撃。

逆袈裟斬り。

突き。

斬り上げ。

その大剣は空間を引きちぎっていく。

自分の中で敵をイメージする。

イメージした敵に斬閃を重ねる。

更に様々な構えから斬撃を行う。

はっ！

気合いの言葉と共に突きを放つ。

一瞬の残心の形から大剣を分解。

その魔力を使い今度は長剣を造り出す。

袈裟斬り。

突き。

斬り上げ。

今度は空間を引きちぎるのではなく空間を斬り裂いてゆく。

十五分程剣を振り続けイメージの中で倒した敵の山を作った。

ふう……っ と息を吐きながら残心を解く。

悠騎「今日は終わるか。クルス、シュミレーターを閉じてくれ」

クルス「了解しました」

クルスの返事と共に荒野が消えただけの無機質な空間に戻る。

出口へ向かうとそこにはスバルがいた。

・
・
・
・
・
・

スバル「ティア、ちょっと走ってくるね」

ティアナ「そうなの？」

スバル「うん。そのへん軽く回ってくるね」

ティアナ「そう」

ティアを部屋に残して私は走りに行く。

・
・
・
・
・
・

二十分位走っていつも訓練している空間シュミレーター近くに通

りかかった。

スバル「あつ空間シュミレーターがついてる」

誰が使ってるんだろう？

悠騎「スバル、一人でランニングか？」

スバル「あつ……はい少しだけ」

悠騎「そうか」

スバル「悠騎さんもお一人でトレーニングですか？」

悠騎「ああ少しな。スバルはまだ走るか？」

スバル「いえ、もうあがります」

悠騎「飲み物いる？」

スバル「はい」

悠騎「はい、どうぞ」

悠騎さんが近くの自販機からスポーツドリンクを買ってきてくれた。

スバル「ありがとうございます」

3月末の夜風は走って温まった体でも少し寒った。

スバル「悠騎さんってなのはさん達といつお友達になったんですか？」

悠騎「小学校から一緒だけど初めて喋ったのは14歳の頃かな。その頃ちよつと塞ぎ込んで、なのは達が話しかけてくれたからその時は立ち直れたんだ」

スバル「そうなんですか」

悠騎「ああ……。スバルは何年か前にあつた空港火災の時になのはが助けたんだつたよな」

スバル「はい。その時のなのはさん憧れて今の仕事を選んだんです」

悠騎「そつか……。お互いなのはのおかげで今があるだな」

スバル「はい！」

悠騎さんはなんだかちよつと嬉しそうだった。

悠騎「そろそろ寮に戻るか」

スバル「はい」

私達は寮へ帰った。

〽 翌日 〽

なのは「はい。今日の早朝訓練はここまで」

一同「ありがとうございました。」

ボロボロになりながら早朝訓練を終えた。

なのは「みんな朝ご飯しっかり食べてちゃんと休んでね」

一同「はい！」

） 食堂 ）

悠騎「おはよう。今日も朝からボロボロだな」

なのは「おはよう。悠騎君」

一同「おはようございます」

フォアード陣は朝練後なので流石にきつそうだ。

なのは「悠騎君、今日の午後に模擬戦するんだけど入れる？」

悠騎「ごめんなのは。午後はユートの所に行くんだ」

なのは「そうなの？」

悠騎「ああ。ロストログアの事を調べにな」

なのは「そつかあ」

ちよつと残念そうだった。

その後30分くらい雑談しながらの食事を楽しんだ。

・
・
・
・
・
・
・
・

ビー・・・ビー・・・ビー・・・

スバル「警報？」

辺りに響き渡っているのは第一種警報。それにアラートの文字も浮かび上がる。

なのは「はやてちゃん。」

なのははやてを通信で呼ぶ。

フェイト「なのは、この警報は？」

ちょうどフェイトも合流する。

悠騎「はやて、この警報は何なんだ？」

はやて「みんな、今レリックの反応が出たんや」

悠騎「どこにだ？」

はやて「第56無人世界「メクスルス」に2つと第43無人世界「レイテンティス」に1つや」

はやても少し焦っている。

フェイト「3つも？」

フォード陣だけでなくのはやフェイトも驚いている。

はやて「スターズ分隊とスカイ01は「メクスルス」にライトニング分隊は「レイテンティス」へ。この前の人達も向かってるかも知れんから気い付けてな」

悠騎「了解」

俺は軽く手を挙げ転送ポートへ行く。

なのは達も返事をして転送ポートへ向かう。

この時、俺は再会するとは思ってなかった。

俺となのは達との出会った切っ掛けであり、大切な人を失った事件の被害者に。

六話（後書き）

ファントム

ストレージデバイス

AIは無いが音声対応システムはある

待機時は銀の指輪

ミッド式カートリッジシステム、マガジン式10発
形はワルサーP99で色は銃身が黒でグリップが赤
ガンモード・射撃魔法に特化したモード

クルス

ストレージ兼インテリジェントデバイス

待機モードは無い

AIは執事口調の男

ストレージデバイスとインテリジェントデバイスの二つのモードあ
るデバイス

インテリジェント時は両手にブレスレットとしてつけている。デー
タ関係や探索系魔法や通信を担当する。

ストレージ時はAIが最低限になって高速処理が出来ようになる。
手の甲に銀の十字が入ったフィンガーレスグローブと二本の剣が交
差する様に描かれた小さな籠手になり戦闘をサポートする。

デバイスを載せます。

更新が遅くなつてすみません。

学校の授業や部活で更新が遅くなると思いますが絶対に完結させるので応援よろしく願います。

感想・アドバイス・誤字脱字など受け付けているのでよかったらどうぞ。

七話

第56無人世界「メクスルス」

そこは草原が広がる世界である。昔は文明あったようで遺跡があるが人は住んで居らず無人の世界となっている。

悠騎「こちらスカイ01。ロングアーチ、メクスルスに着いた。レリックの場所は特定できたか？」

アルト「こちらロングアーチ。スカイ01へ、レリックは二つともそこから南へ50km程行った所にある遺跡の中です」

なのは「スターズ分隊、了解」

悠騎「スカイ01、了解」

俺は地図を表示し確かめる。

ヴータ「ここから距離があるな」

悠騎「確かティアナとスバルは飛べなかったよな」

スバルとティアナの方へ尋ねる。

スバル「私はウイングロードがあるからついて行けると思いますが……」

ティアナ「私は……飛べ無いです」

ティアナは俯きながら答える。

悠騎「しゃあない俺が先行する。みんなは後からきてくれ。なのは、
ティアナを頼む」

なのは「うん！悠騎君気を付けてね」

ヴータ「私らも急ぐよ」

ティアナ「すみません」

悠騎「気にすんなよ」

俺そう言々と飛行魔法を発動し飛ぶ。

なのは「私達も行くぞう」

ティアナ「はい！」

スバル「はい！」

ヴー
タ「
おう
！」

•	•	•	•
•	•	•	•
•	•	•	•
•	•	•	•

第43 無人世界「レイテンティス」

そこはほとんどがジャングルに覆われ多種多様な生き物が生息する動物の楽園の様な世界だ。

フェイト「こちらライトニング01。ロングアーチ、レイテンティスに着いたよ。レリックの場所はある？」

私は音声通信をしながらの地図を出す。

シャーリー「こちらロングアーチ。レリック反応はそこから南東へ30km程行った所にある大樹の中です」

フェイト「了解！」

シグナム「私が先頭で行こう」

フェイト「エリオとキャロは真ん中で」

エリオ「はい！」

キャロ「はい！」

フェイト「それじゃ行くよ」

私の合図と共に私とシグナムは飛行魔法でエリオとキャロはフリードで飛び立つ。

メクシルス

先程から巨大な遺跡が目に入ってくる。

悠騎「クルス、異常は無いか？」

クルス「今の所、生体反応も魔力反応ありません」

悠騎「そうか……」

余りにも静かすぎる。何も無いに越したことはないが……。一抹の不安を感じながらスピードを上げていく。

遺跡

更に5分程飛び続け遺跡へとたどり着く。

悠騎「こちらスカイ01。ロングアーチ、遺跡に着いた。レリックは何処だ？」

「……………」

悠騎「ロングアーチ、応答しろ」

「……………」

クルス「マイロード、通信妨害確認。生体反応及び魔力反応を確認しました」

ちっ…………。

クルスの報告を聞きながら舌打ちをする。

悠騎「ファントム、ガンフォーム。クルス、レリックの場所を探索してくれ」

俺は右手の指輪を拳銃に変える

クルス「イエス、マイロード」

さて、恐らく敵はオーバースでこっちはC+か…………。

クルス「マイロード。左、魔力弾数30来ます」

クルスの言葉に反応し左を見ると30個程のダークレッド色の魔力弾が向かってくる。

悠騎「サイクロンシューター……ファイア!!」

風を秘めし魔力弾を数個作り撃ち出す。

俺の魔力弾は向かってくる魔力弾と衝突し。

暴!

暴!

暴!

暴!

暴!

中にある風を解放し鎌鼬よって周りも迎撃していくが。

クルス「マイロード。撃ち漏らしがあります」

まだ、5個程の魔力弾が向かってくる。

悠騎「クルス、クロスシューターで迎撃しろ」

クルス「クロスシューター、セット」

クルスは短剣型の魔力弾を数個に作り出し。

クルス「ファイア」

撃ち出す。

クルスが撃ち出した魔力弾は狙い違わず残りの魔力弾を破壊する。

???「よく私の攻撃を防いだな」

酷く冷たい声のした方を見るとそこには白いローブを身に纏った人が立っていた。

……やっぱりこの前なのは達が会った奴か。

悠騎「お前、何者だ？」

???「人に名を聞くときは自分から名乗るのが礼儀だろう」

悠騎「そうだな。俺は時空管理局機動六課所属、水無森悠騎一等空佐だ」

???「我が名はノワール。冥府の王だ」

白いローブの男はノワールと名乗る。

悠騎「顔は見せてくれないのか？」

ノワール「見せる気はないな」

悠騎「そうかよ。なら力ずくでも見せて貰う」

ファントムの弾丸を選びカートリッジをロード。更に左手に魔力の剣を作り出す。

「ノワール、力で来るか……。よからう」

ノワールも剣型ロストロギアを取り出し左手で構える。

悠騎「いくぜ」

ノ
ワ
ー
ル
「
来
い
」

二人の剣がぶつかり合う。

レイテンティス

悠騎がノワールと剣を交えようとしていた時、フェイト達ライトニング分隊は大樹へと到着しレリックを搜索していた。

大樹はとても巨大だったがキャロとケリュケイオンの活躍によりかなり早く位置特定が成功した。

エリオ「レリックありました」

フェイト「キャロ封印お願い」

キャロ「分かりました」

キャロが封印を終える。

フェイト「こちらライトニング01レリックの確保封印処理、完了しました。これより帰還します」

シャーリー「こちらロングアーチ了解。」

フェイトがロングアーチへ報告し帰還する。

ケリユケイオン「魔力反応確認、こちらへ向かってきます。」

ケリユケイオンが光りながら報告を告げる。

みんな突然の情報に気を引き締める。

そこへ現れたのは藍色のローブを着た男だ。

フェイト「あなたは何者？」

フェイトはローブの男へ問いかける。

???「我が名はタナトス」

フエイト「あなたの目的は何？」

タナトス「お前達が持っているレリックを奪うことだ」

タナトスは低い声で言う。

シグナム「渡すと思っているのか」

シグナムはレヴァンティンを構える。

タナトス「言っただけで奪うと」

タナトスは拳を構えながら静かに低い声で言う。

その声が開戦を告げた。

七話（後書き）

更新が遅くてすみません。

可能な限り速くするので応援よろしくお願いします。

感想やアドバイス等受け付けているのでよかったら書いてください。
待ってます。

八話

メクスルス

悠騎がノワールと戦い始めた時、なのは達スターズ分隊は遺跡まで約10kmの場所を飛んでいた。

なのは「こちらスターズ01。ロングアーチ、あと10分位で遺跡に到着します。」

アルト「こちらロングアーチ。先程からスカイ01との通信が繋が
りません。更に遺跡付近で推定Sランクの魔力反応を確認しました。

なのは「えっ！分かりました。こちらにも急ぎます。」

アルト「お願いします。」

悠騎君……無茶しないで。

遺跡

眼下に遺跡を見下ろす天空に漆黒と闇紅の軌跡が描かれる。

悠騎「裂風一閃!!」

片手でノワールに荒々しき風を纏いし斬撃を放つ。

ノワール「ふっ」

ノワールはその斬撃を軽々と受け止める。

ノワール「モルテシューター」

ノワールの周りに10個の魔力弾が形成されていく。

やばい……

クルス「ブリッツアクション、クロスシューターセット」

クルスが判断し後ろへと高速移動魔法を発動してくれる。

ノワール「行け」

ノワールは魔力弾を放ってくる。

クルス「ファイア!!」

ノワールとクルスが放ったシューターがぶつかり相殺しあい煙が巻き起こる。

ノワール「亡牙っ」

ノワールが煙の中から飛び出し自身の剣を振りかぶる。

ノワール「一閃」

膨大な魔力が込められた斬撃が悠騎に迫る。

斬！

悠騎「ちっ……」

激！

咄嗟に魔力剣の硬度を上げ受け止める。

ノワール「吹き飛ばす」

言葉と共に地上へと飛ばされる。

くそっ……

クルス「フロッターフィールド」

地上に激突寸前、クルスが緩和用の魔法を展開してくれた。

悠騎「ありがとう、クルス」

クルス「いえ」

悠騎「カートリッジはファントムの中のマガジンに5個と10個入

リマガジンが1つ、計15個か……」

少なくともないが樂觀視できない。

クルス「今は退いてスターズの皆さんと合流しましょう」

クルスは戦略的撤退を提案してくる。

悠騎「ダメだ。今退いても奴がその場に留まってくれるとは限らない」

クルス「しかし……」

悠騎「それに奴の顔も見えてないし名前も本名じゃ無いかも知れない。今、レリック持って行かれたらまた後手に回らなきゃ行かなくなる」

クルス「そうですが……」

それに……身体が万全の状態じゃないのは達を出来れば戦わせたくない。

悠騎「最悪一撃与えて奴の正体を見る。そして、俺が戦ってる間になのは達にレリックを確保して貰うしかない」

クルス「けど……スターズの皆さんが何時来るか解りませんよ」

悠騎「大丈夫だ。なのは達はすぐ来る。俺は信じてるから」

再び魔力剣に魔力を追加し硬度を高める。

クルス「分かりました。私も全力でサポートします」

クルスは力強い言葉で返す。

飛行魔法を使いノワールの居る高度まで戻る。

ノワール「話は終わったか？」

悠騎「ああ……。待っていてくれてありがとう」

ノワール「いや……。今から死に逝く者に最後の言葉くらい遺させてやろうと思ってな」

悠騎「残念だけど俺は今死ぬ気はない」

ノワール「そうか……」

ノワールは剣を構えながら呟く。

ノワール「行くぞ」

悠騎「来い！」

ノワールは剣を構えたまま突っ込んでくる。

悠騎「クルス！」

クルス「ブリッツアクション」

ノワールとの距離を取る。

ノワール「モルテシューター」

ノワールは自身の目の前に20個程の魔力弾を作り出す。

悠騎「ファントム、バレットソニック」

ファントム「Yes」

悠騎「クルス、弾道予測を」

クルス「イエス、マイロード」

右目の前に小型のスクリーンを展開させ、クルスから送られてくる弾道予測と勘を頼りに魔力弾を迎撃していく。

悠騎「ファントム、マガジンの中のカートリッジを全部ロードしろ。クルス、バリアジャケットノーマルリリースアサルトセット。風迅を使う」

ファントム「Yes」

クルス「イエス、マイロード。ノーマルリリースアサルトセット」

黒いロングコートと紺のインナーが消え紅いインナーと黒いベストへと変わる。

ファントムが5個のカートリッジロードを終えマガジンを入れかえる。

カートリッジ内の大量の魔力が悠騎へと流れる。

悠騎「使うのは久し振りだが……行くぜ!!」

轟!……轟!……轟!……轟!

大量の魔力が次第に消えてゆき代わりに凄まじい風が悠騎を取り巻いていく。

吹き荒んでいた風は悠騎の両手、両足、胴へと圧縮されてゆく。

普通なら目視は出来ないはずの風が魔力によって圧縮され魔力を巻き込む事で黒い風となり目視出来るようになる。

それは黒き鎧。

暴風の鎧。

悠騎「クルス!」

クルス「ブリッツアクション」

三度目の加速、今度は後ろではなく前へ……ノワールへ向かう。

悠騎「風迅・裂風一閃!」

先程の斬撃を越える風を伴い、遙かに速く重い斬撃を放つ。

ノワール「ぐっ……」

ノワールは再び剣で防ぐが少し顔を歪ませる。

悠騎「烈っ破!!」

魔力剣の風を解放しノワールを吹き飛ばす。

悠騎「ファントム、ブレイドフォーム」

ファントム「Yes」

ファントムの銃口から魔力刃が形成される。

悠騎「風迅・裂風双閃っ!」

魔力刃の形成と同時に近づき二つの刃を左右から振るっ。

ノワール「ちっ……」

魔力剣はノワールの持つ剣によって、ファントムの刃はベルカ式魔法陣を模した小型のシールドで防がれる。

ミシっ

ノワール「調子に乗るな」

ノワールは二つの刃を押し返し自分の剣を上段から一気に振り下ろす。

悠騎「くっ……」

悠騎は魔力剣とファントムの刃を交差させ受け止める。

ミシっ……ミシっ

クルス「ブリッツアクション」

間合いをあける。

ノワールは再び上段に振り上げ。

ノワール「モルテツァーナ」

振り下ろすと同時に剣を介して魔力を撃ち放つ。

高圧縮された魔力の塊が悠騎へ突き進む。

悠騎はファントムの引き金を引き魔力刃を魔力の塊へ撃ち出す。

ノワールのモルテツァーナと悠騎の魔力刃は互いを喰らいながら霧散していく。

悠騎「ファントム、カートリッジ5個ロードしろ」

再び魔力が風へと変換、圧縮され悠騎の体を包む。

カートリッジは残り5個

分かっていたはずの魔力消費の早さに焦りを感じつつ次の一手の為に考えを巡らす。

出来れば風迅の消費が少ないミドルかロングレンジでやりたいけど。

風迅……それは魔法と言うより魔力操作技術の応用に近い。

魔力変換資質によって生み出した風を魔力で圧縮して鎧の様に身に纏うそれが風迅。

その風を剣に移動させることで斬撃の強化や足に集め一気に解放したり、一定量を持続的に解放することで瞬間的又は恒常的な速度強化が可能だ。

だが、解放した風を再度魔力で圧縮させることは難しく、烈破や魔力刃にのせて撃ち出せばあっという間に風は無くなってしまう。

リミッターが有るこの状態で風を出し惜しみすればすぐに負けるだろう。

ノワール「そう何度も考える時間はやらんぞ」

後ろから静かな怒気がこもった声がする。

しまった……。

どうやって中距離で戦うか、それを考えていた隙に斬り殺されたんじゃ洒落になら無い。

声の方へ顔を向けたときにはノワールは上段の構えから剣を振り下ろし始めている。

……ヤバイ。

クルス「ラウンドシールド」

ノワールの剣と悠騎の間にミッド式の魔法陣が現れ、剣の殺意を遮る。

振り返り、シールドに手を添え叫ぶ。

悠騎「シールドノヴァ」

魔法陣を形成する魔力を暴れさせ、ノワールとの距離を取る。

悠騎「すまない、今日は助けられ放しだな。」

ノワールから視線を外さずに愛機へ呟く。

クルス「いえ、貴方を全力でサポートするのが私の務めですから」

……本当にありがとう。

愛機に心から感謝しながら、再度銃と剣を握る手に力を込める。

八話（後書き）

遅くなってすいませんでした。

大学が忙しくなっているのでこの位の更新速度になるとは思いますが
頑張るので応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929j/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～黒き風を纏いし者～

2011年10月9日20時11分発行